

再生現場を空間計画の立場から確認して (ヒューム地区)

文部科学省・私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
 『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

1. ヒューム地区（マンチェスター）

ヒュームの空間的特徴は、ガイドラインではパーミアビリティと述べられているようだが、私の主張する「親街路性」の実現に通じることであり、基本的には賛同できる。

○スーパーブロックを一般市街地の小街区に分割していることは、賛同できる。

○沿道に対して極力セットバックしない方針は、建ち並ぶ建築で道路空間（＝まちの空間）を形成していることであり、実現できているそのスケールからもできる。

○沿道に対して、極力開放的であることは、人気（ひとけ）を感じる（親街路性 注：筆者）ことに通じ、賛同できる。夜間にも歩いてみたが、家の中の動きが垣間見えるほどで、大いに賛同できる。

○駐車スペースは基本的に街区内部に平面で設け、各住戸から見えるような仕組みになっているのは理解できる、さらに、ところどころ、道路内駐車を採用しているところがあり、適宜併用することは賛同できる。交通量の少ない小街区道路で、かつ沿道を開放的にしているのだから、道路内に車を停めることは風景悪くないと思う。従前エリア敷地内に直角駐車スペースを設けるのは、道路が空間として希薄になり、道路から住宅が遠くなることも含め、安心・安全性の見地からも良くない。

○街の骨格を通りとして復活させたことも賛同できる。

×街区のコーナーを建築的に特色づけているのは理解できるが、コーナーから入る形式は、沿道型・街区型のまちなみ建築としてはうま

くいっているとは思えない。きちんと、道路に応答して解決したほうが良い。そうすれば、建築としての街路角のデザインができ、日常生活上の周辺環境との豊かな応答関係が実現できる。コーナーがエントランスだと夜間の光があるのは確かだが、安全安心感のある生活の視線にはならない。

×建築のデザインの質が、商業的で平均的すぎて退屈である。考え方は理解でき、賛同できるが、もっとレベルの高い建築が混在すべきである。多様な住環境が目指されているのに、結果的に単調なデザイン、平坦な集住環境のデザインになってしまっている。

×文章ガイドラインの限界、デザイン協議のシステムが必要である。





2. コーポラティブ住宅 (Homes for Change)

○結構大きなスケールの建物群であり、街路側においても多様な素材が混在して使用され、カタチも分棟・文節されていることは賛同できる。建築としてのレベルは高く、総じて平坦な感じのするヒューム地区でほっとできる建築である。

○街区内部は、入居者が参加して作り上げたコーポラティブ住宅にふさわしい、親密な日常空間が形成されている。

△しかし、どちらかというともちなみに対してよりは、街区内部に対して非常に豊かな空間が形成されており、外部に対して、特に大通り側の1階部分で、ガイドラインにあるような住戸の開放性が実現できていればモデルとしてもっと良かった。



関連リーフレット：004 029

『再生現場を空間計画の立場から確認して（ヒューム地区）』

発行：2012年3月

調査：江川直樹（関西大学 教授）
執筆：江川直樹（ " " ）

（調査：2011年11月25日～27日）
本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>